２０２４年１０月

京都新聞社会福祉事業団の活動について

公益財団法人
京都新聞社会福祉事業団

京都新聞社会福祉事業団
設立60周年

本年度、京都新聞社会福祉事業団はおかげさまで設立６０周年を迎えることができました。１９６５年（昭和４０年）３月１８日に京都・滋賀の地域福祉の増進に寄与するために、京都新聞社が取り組むすべての社会福祉事業を集約し、財団法人として発足いたしました。

当事業団にお寄せいただいた皆さまの温かい善意は、当事業団が取り組む福祉活動の大きな力となっております。

ハンディがありながらも向学心に燃える学生に贈る「愛の奨学金事業」、障害のある人の自立や社会参加を支援する「障害のある人のための事業」、お年寄りの生きがいづくりを応援する「高齢者のための事業」、子育てに悩むお母さんたちの子育てを支援する「子育て応援事業」、福祉施設の活動を支援する「福祉活動支援事業」などの地域福祉の活動に、お預かりした寄付金はすべて大切に役立てさせていただきます。

奨学金事業

◆京都新聞「愛の奨学金」（贈呈式７月／京都新聞文化ホール）　…　４頁

京都、滋賀に生活拠点を置く高校生や大学生、専門学校生らを対象に、返済不要の奨学金を支給しています。家庭の事情で家計が困窮し、教育費用の捻出が困難になり、学業を継続できなくなったり、進学が困難になったりする生徒学生を支援するために、当事業団の発足から６０年間絶やすことなく継続している事業です。

奨学金は、公募の「一般の部」と「交通遺児の部」、公立高校から推薦をいただく「定時制・通信制高校生の部」、「児童養護施設の高校生への奨学激励金」の4部門があり、支給額は、高校生に一人当たり年額９万円、大学生、専門学校生に年額18万円、児童養護施設（京都、滋賀の１７施設）の高校生には奨学激励金３万円を支給しています。

本年度の支給額は、「一般の部」は合計２６４６万円、「交通遺児の部」は１６２万円、「定時制・通信制高校制の部」は９０万円、そして「児童養護施設の高校生への奨学激励金」は４３５万円で、総額で３３３３万円を支給しました。

助成・贈呈事業

◆障害のある人のための事業

「障害のある人の工賃増へ向けての取り組み」助成（２月～３月） … ５頁

障害ある人の工賃増を目指す福祉施設や作業所の取り組みを助成

「京都新聞夏季キャンプ・レク活動を応援」助成（６～9月）

障害者団体や支援グループのレクリエーション活動を助成

◆高齢者のための事業

在宅高齢者福祉サービス支援「ホームヘルプサービス活動への備品」助成（１２月）

在宅高齢者へのホームヘルプサービスを行う非営利の団体に福祉・介護用品の購入費を助成

「高齢者配食サービス支援」贈呈(１月) … ６頁

一人暮らしの高齢者や高齢者世帯に配食を行うボランティアグループや団体におこめ券を贈呈

「高齢者へのプレゼント」贈呈(２月) … ６頁

特別養護老人ホームへ介助用車いすを贈呈

◆子どものための事業

「児童養護施設の子どもたちのレクリエーション」助成（９月～翌年３月）

京都・滋賀の全児童養護施設へレクリエーション活動を助成

「児童養護施設の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）

中学、高校の卒業とともに京滋の児童養護施設を巣立つ子どもたちに「卒業祝い金」を贈呈

「交通遺児の子どもたちへの卒業お祝い金」贈呈（３月）

交通遺児で小学校、中学、高校を卒業する子どもたちに「卒業祝い」として図書カードを贈呈

◆子育て応援事業

「子育て仲間を応援」助成（６月）

子育て中のお母さん、お父さんの小規模なグループが行う交流会などを助成

「子育て事業助成」助成（６月）… ７頁

子育て支援団体や子育て支援団体が行う事業に助成

◆福祉活動支援事業

「京都新聞福祉活動支援」助成（２～３月）… ５頁

京滋の福祉団体を「運営部門」と「設備整備部門」の２部門で幅広く助成

==========

催　事

◆障害のある人のための事業

「京都手話フェスティバル」(1月／京都新聞文化ホール) … ８頁

手話の普及と発展を目指す、手話スピーチコンテストと手話アトラクション

「シンポジウム障害のある人の就労支援」(２月／京都新聞文化ホール) … ９頁

障害がある人の就労支援を考えるシンポジウム

「みんなで海釣り-障害のある人の体験講座」 … １０頁

(９月／１泊2日・宮津市 京都府立海洋高等学校 桟橋)

障害のある人の余暇活動の支援を目的に、宮津市内で１泊2日で障害者、介助者約50人とボランティア約120人が参加。神戸新聞厚生事業団と共同事業。

「京都新聞おでかけ公演・障害者団体」（２月～３月で2カ所）
障害者施設へ演奏家らを派遣する出張型事業

◆高齢者のための事業

「京都新聞おでかけ公演・高齢者団体」（２月～３月で２カ所）… ６頁
高齢者施設へ演奏家らを派遣する出張型事業

◆子どものための事業

「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 京都」（１０月）
「京都新聞お楽しみ子どもシアター in 滋賀」（１２月）
京都・滋賀で人形劇などの公演を開催、子どもたちを招待する

◆福祉啓発事業

「京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞」… １１頁
（贈呈式１月／京都新聞文化ホール）
京滋で地域福祉の向上に著しい功績のあった個人または、団体を顕彰する「京都新聞福祉賞」と、今後の活動が期待できる活動歴が浅い、または若い世代の個人や団体を顕彰する「京都新聞福祉奨励賞」を実施

「京都新聞ともに生きるフォーラム」… １２頁
（11月／京都新聞文化ホール）
当事業団のメインテーマである「ともに生きる」を事業名として、一人一人の命を大切にし、みんなが助け合って生きる社会について考えるフォーラム。京都新聞朝刊「福祉のページ」のコラム執筆者が講演を行う

◆障害者スポーツ事業

多岐にわたる障害者のためのスポーツ事業に取り組んでいます。
全京都障害者総合スポーツ大会（６～１０月／京都府内各地）
7競技=卓球バレー・卓球・水泳・陸上競技・アーチェリー・フライングディスク・ボッチャ
全京都車いす駅伝競走大会・ミニ駅伝競走大会
（９月／京都府立丹波自然公園）
天皇杯 全国車いす駅伝競走大会
（３月／国立京都国際会館前ーたけびしスタジアム京都）
京都ゆとりスポーツの集い（５月／山科区 勧修寺運動公園）
パラアーティスティックスイミングフェスティバル
（１０月／京都市障害者スポーツセンター） ほか

私たち、京都新聞社会福祉事業団は「ともに生きる」をテーマに、これからも助け合う社会づくりを目指して活動を続けてまいります。
今後もお一人でも多くの方に支援が行き渡りますように、寄付金を広く呼びかけて、困っている人が安心して暮らしていける地域社会を目指して、邁進していく所存でございます。

２０２４年度 京都新聞「愛の奨学金」贈呈式
（２０２４年７月２２日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 京都新聞愛の奨学金を贈呈 ◆

目標や夢へ善意の後押し
他者の存在気付ける大人に

学生・生徒356人に3333万円

京都新聞社会福祉事業団の2024年度「京都新聞愛の奨学金」贈呈式が6日、京都市中京区の京都新聞社で行われ、物価高騰など厳しい経済状況下、将来への目標と希望を抱いて学ぶ京都府と滋賀県内の学生・生徒合計356人に総額3333万円が贈られた。

内訳は、公募一般の部で高校生84人、大学生・専門学校生105人、交通遺児の部で高校生6人と大学生6人、公立高が推薦した定時制・通信制の部で10人。19日には奨学激励金を児童養護施設の高校生145人に贈った。

大藪俊志・佛教大社会学部教授、伊住公一朗・京都青年会議所理事長、横江美佐子・京都市南青少年活動センター所長の選考委員3人が成績に加え、作文などで将来への思いや現在の学業に対する意欲をくみ選んだ。

一般の部には高校生176人と大学生・専門学校生224人、計400人から申請があった。ひとり親家庭が半数を超え、物価高、親の失業、家族の病気入院など困難な事情を申請理由にあげた。

贈呈式では代表の生徒（右）に白石真古人常務理事から奨学金が手渡された（6日、京都市中京区の京都新聞社）

贈呈式は2回に分けて開かれ、白石真古人常務理事と選考委員が代表生徒に奨学金を手渡した。常務理事は奨学金の趣旨や選考の経過などを説明。多くの寄付者からの言葉も引用し、「その思いをしっかりと受け止め、奨学金を大切に使ってください」と話した。大藪選考委員長と横江委員も「作文を通じ、皆さんが将来の夢や希望を持ち、日々の勉学や部活動に励まれていることを知りました。奨学金を有意義に活用し、他者の存在に気付けるような大人になってください」と激励した。

同奨学金は、事業団が発足した1965年以来続いている。誕生日にちなみ、年齢に100円をかけて寄付をする本紙の「誕生日おめでとう」コーナーへの寄付や、奨学金事業協賛寄付金、交通遺児のための寄付金などを加えて支給している。高校生は年額9万円、大学生・専門学校生は同18万円が返済不要で給付される。奨学激励金は3万円が贈られた。

困っている学生のためにと20年度から1千万円以上の寄付を続けている左京区の匿名女性から今年度も、1千万円の寄付があり累計6千万円となった。山科区の女性からの寄付500万円など、無償の善意が続いている。

贈呈式では、京都市内の男子学生は「4年生の今年は卒業論文準備の資金に奨学金を充てたい」と考えていたが、将来は高校教員をめざすとの目標を踏まえ、「社会に出ても常に謙虚に、感謝の心を忘れず、こうした支援も、次世代に返していけたら」と謝辞を述べた。

滋賀県内の医科大学で学ぶ女子学生は地域医療に関心を持ち、勉学や課外活動に励んでいる。しかし、授業やテスト勉強が忙しく、夏休みなども実習や課外活動でアルバイトの時間が十分にとれない。奨学金にはこれまで「教科書代や病院見学の費用に充てることができ、学習に集中する大きな支えとなっている」と感謝してきた。贈呈式の謝辞では「寄付者の期待に応え、医師になり、誰かを助け、応援し、社会に恩返ししたい」と話した。

障害のある人の工賃増へ向けての取り組み助成
京都新聞福祉活動支援助成
（２０２４年４月１日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

京都新聞社会福祉事業団だより

京滋46団体に745万円助成

福祉活動支援や賃金増へ向けての取り組み

京都新聞社会福祉事業団は、2023年度の「京都新聞福祉活動支援」と障害のある人の「工賃増へ向けての取り組み助成」両事業の贈呈式をこのほど、京都市中京区の京都新聞社で行った＝写真。京都、滋賀両府県の福祉施設やボランティアグループなど46団体に総額745万円を助成した。

福祉活動支援は、運営、設備両部門で団体や施設に助成している。本年度は運営23団体（申請29団体）、設備10団体（同15団体）に計500万円を助成。高齢者や難病患者の支援、ひきこもりの若者の自立支援を行う団体などの活動費や障害者施設での送迎車両購入費の一部、視覚障害のある人向けの音訳ボランティアグループの機材購入などを支援した。

工賃増助成は、障害のある人の賃金増につながる経済活動を支援しており、本年度は13団体（申請20団体）に計245万円を助成。消防ホースをアップサイクルし製品化するためのミシンやドリップパックのコーヒーを増産するための機材の購入、新商品の菓子製作のための電気乾燥機の購入などを支援した。

助成団体は次の通り。

◇京都新聞福祉活動支援

【運営部門】

障碍者芸術推進研究機構（京都市北区）、お客様がいらっしゃいました（下京区）、京都府網膜色素変性症協会（中京区）、子ども会・少年団を育てる左京センター（左京区）、ハンド&ネイルケアボランティアチームガンチー（同）、i－care kids京都（同）、内部被曝から子どもを守る会・関西（同）、助けあいグループりぼん（東山区）、チャイルドライン京都（山科区）、きょうとWAKUWAKU座（右京区）、京都YMCA長岡こおろぎ（西京区）、ジョイント西京視覚障害者ボランティア（同）、西京少年補導委員会（同）、東九条地域活性化センター（南区）、京よりそい（宇治市）、『くらしの応援隊』ボランティアの会（長岡京市）、パーキンソン病支援センター（八幡市）、のびのび倶楽部（京都府久御山町）、京丹波町社会福祉協議会（京丹波町）、全国ギャンブル依存症家族の会京都（京都府内）、音と花と人と（大津市）、子ども食堂スマイルシード（同）、若者自立支援ボランティアGroup居場所の会「レリーフ」（守山市）

【設備部門】

京都犯罪被害者支援センター（京都市上京区）、京都YWCA（同）、京都手をつなぐ育成会山科工房（山科区）、洛西寮朗読ボランティアサークル（西京区）、西京視覚障害者協会（同）、オープンスペース祐の風（同）、朗読ライブボランティア『拍子木の会』（長岡京市）、あしたばの家（八幡市）、はた楽きの里子ども食堂わいがやキッチン（大津市）、今津ふくしの会（高島市）

◇工賃増へ向けての取り組み助成

就労継続支援B型事業所サリュ（京都市上京区）、プティパ（下京区）、障がい福祉サービス事業所成望館（南区）、エルファ共同作業所（同）、飛鳥井ワークセンター（左京区）、楽々堂（同）、加音西京極作業所（右京区）、いかるがの郷（綾部市）、ワークショップ野の花（城陽市）、暮らしランプ・なかの邸（長岡京市）、アシストセンターえーる（京田辺市）、おーぷんせきみ（京都府精華町）、ウッディ伊香立（大津市）

高齢者配食サービス支援（２０２４年２月１９日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

配食ボランティアに「おこめ券」を贈呈

京滋の34団体、2861食分

京都新聞社会福祉事業団は、１人暮らしのお年寄りや高齢者世帯に食事を届けている京都・滋賀の配食ボランティア34団体に計2861食分の「おこめ券」を贈呈した。

毎年、高齢者事業寄付金や歳末ふれあい募金の一部をもとに実施。本年度は申請のあった京都市内６、京都府内16、滋賀県内12の計34団体に430㌔分（高齢者１人当たり１食150㌘相当）のおこめ券を配食に役立ててもらう。

京都市北区の待鳳社会福祉協議会のボランティアグループあけぼの会は10日、地域の小学校で12人がおこめ券で購入した米を炊き上げ、エビなどの天ぷらやホウレンソウとシメジのゴマあえ、だし巻きなどを添えた弁当60食＝**写真**＝を、１人暮らしの高齢者らに届けた。

同協議会では年10回、高齢者の見守りを兼ねた配食活動を行っている。配食担当の岡崎悦子さん（74）は「食材が値上がりする中で支援は助かります。おかずの充実した弁当を届けられます」と話した。

高齢者へプレゼント（２０２４年３月１１日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

介助用車いす８台を贈呈

京滋の特養ホームに１台ずつ

京都新聞社会福祉事業団は、「高齢者へのプレゼント事業」として京滋の特別養護老人ホームに介助用車いす８台を贈呈した。2008年度から毎年実施し、贈呈数は292台となった。

京滋の全施設に介助用車いすを１台ずつ贈ることを目標としており、企業や団体からの「記念日おめでとうコーナー」や高齢者事業協賛寄付金などを原資にしている。

車いすは、背もたれと座面角度が調整できるティルト・リクライニング介助型と、ひじ置きと脚部が動かせる多機能介助型の２種類から選択。

特別養護老人ホーム洛和ヴィラ天王山（京都府大山崎町）は、前者を選び、入居者が試乗した＝**写真**。施設長の銅子大介さん（41）は「歩行や座位保持が困難な入居者も増え、長時間の離床が困難な方に活用します」と話した。

他の贈呈先は次の通り。

京都ライトハウス朱雀（中京区）、はやま（伏見区）、深草しみずの里（同）、ＹＭＢＴ（八幡市）、千松の郷Ⅱ番館（彦根市）、カナリヤの家大門（守山市）、スマイル（米原市）

京都新聞おでかけ公演（２０２４年３月２５日付　京都新聞朝刊）

事業団だより

京フィルデュオの音色響く

5年ぶり「おでかけ公演」

京都新聞社会福祉事業団主催の「おでかけ公演」が、守山市の滋賀県障害児協会・湖南ホームタウンでこのほど行われた＝**写真**。

京都府、滋賀県内の障害のある人や高齢者の福祉施設や団体、つどいを訪ね、演奏会などの催しをプレゼントし、楽しいひとときを過ごしてもらおうと、2006年度から実施している。本年度が５年ぶりの開催となり、障害のある人と高齢者を対象に各２団体で行う。

公演は、京都フィルハーモニー室内合奏団に所属する森本真裕美さん（バイオリン）と田中裕美子さん（ファゴット）が出演し、トークやデュオ演奏を披露。クラシック音楽や日本の歌メドレーなど12曲を演奏した。同タウンを利用する約35人が、曲に合わせて手拍子し、体でリズムをとって楽しんだ。

生活支援員の島林育子さん（28）は「皆さんと一緒にコンサートへ行く機会があまりないので、今回の公演を楽しみにしていました」と話していた。

子育て仲間を応援助成・子育て事業助成
（２０２４年５月１４日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

◆ 子育て応援事業 ◆

絵本作家トーク盛況
シャボン玉催し手応え
小規模運営の継続後押しも

京都新聞社会福祉事業団は、京都府、滋賀県で工夫を凝らして子育てに取り組むグループに一律2万円を助成する「子育て仲間を応援」と、上限15万円でイベントなどを支援する「子育て事業助成」を毎年行っている。2023年度に支援した活動例を紹介する。

京都府京丹波町の絵本サークル「きいろいばけつ」は、結成20周年記念イベントに亀岡市在住の絵本作家北川チハルさんを招いて11月に地元の和知ふれあいセンターで「絵本トークライブ」を開いた。同サークルは普段から和知小や「わちこども園」などで読み聞かせや、同センターでお話会「えほんはともだち」などを開いている。

11月のイベントには乳幼児から小学生の親子約60人が参加。子どもらは同センターのアリーナに敷いたマットに座り、大型プロジェクターも使って展開された絵本トークに夢中で聞き入った。代表の藤本英子さん（57）は「事業助成金10万円を含めた予算で、講師を招き、絵本を効果的に展示する面展台も製作できて役立った」と話している。

滋賀県日野町の必佐地区社会福祉協議会のボランティアグループ「子育てひろば」は11月、草津市に住むシャボン玉のパフォーマーによる「シャボン玉ショー」を地区内の内池公園で開いた。同グループは毎月2回、必佐公民館などで、未就園児と保護者ら十数組が、大型遊具で遊んだり、ハロウィンパーティーやクリスマスパーティーなど季節のイベントを行い、子ども同士の触れ合いや、保護者の情報交換・相談の場としている。

メンバーの一人、中西眞弓さん（63）は「事業助成に自己資金を加え、人数制限もせず、普段よりも広い地域からの参加があり、大規模にシャボン玉イベントができて、皆で飛ばして楽しめました。近所のお年寄りや通りすがりの人も集まり、写真を撮るなど盛り上がった。その後の『子育てひろば』への参加者増にもつながったかな」と助成の効用を感じている。

無数のシャボン玉や、とびきり大きなシャボン玉などを皆で飛ばし楽しんだ（2023年11月、滋賀県日野町）＝提供写真

「仲間を応援」助成を受けた京都市右京区の「わたぼうし文庫」は、後藤由美子さん（70）の家を拠点に4人で運営。幼児から小学生の親子を対象に、本の読み聞かせや手作り工作などを毎月行っている。「コロナ禍」もほぼ終息した23年度は室内開催もでき、季節にちなんだ桜もち、フルーツ寒天、月見団子、クリスマスクッキーなどおやつ作りも楽しんだ。手作り工作では、凧の絵をかいて組み立てたり折り紙などもした。後藤さんは「小規模な運営だが、継続には補助金が後押しになる」と言う。

同じく「仲間を応援」助成を受けた「ゆらんこおもちゃライブラリー」は、西京区の西京児童館2階で田畑昌子さん（65）らボランティアが月に2回開いている。未就園児と母親らが対象で、木のおもちゃで遊び、夏にはうちわ、節分には鬼の面作り、折り紙なども楽しむ活動を続けている。

23年度は「子育て仲間を応援」で82団体（京都市内12、府内37、滋賀県内33）に総額164万円を、「子育て事業助成」で計13事業（市内4、府内3、県内6）に総額83万5千円を助成した。

24年度の「子育て事業助成」と「子育て仲間を応援」の申請は5月31日まで受け付けている。

京都手話フェスティバル
（２０２４年２月１２日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

●●● 京都手話フェスティバル ●●●

「出会い」キーワードに 思いや主張スピーチ

18組20人、豊かに表現

手話の普及と聴覚障害者のコミュニケーション充実を目指す第19回京都手話フェスティバル（京都府聴覚障害者協会・京都新聞社会福祉事業団主催）が1月28日、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。中学生から高校生、学生・社会人ら過去最多の18組20人が「出会い」をキーワードに「手話スピーチ」し、それぞれの思いや主張を身ぶりや表情も交えて豊かに表現した。KAZUKIさんの手話パフォーマンスもあり、約250人の参加者を楽しませた。

スピーチ一般の部では14組15人が発表。最優秀賞を得た清寺真由実さんは「手話をきっかけに相手を見て会話することの大切さを知った。互いの心を伝える手話ができるようになりたい」と丁寧な手話で述べた。

優秀賞の種村光太郎さんは大学院で手話を勉強しながら手話通訳もしており、大学で出会ったろう者の友人とスムーズにコミュニケーションしたいと手話サークルに入った経緯を話した。同じく優秀賞の櫻井恵さん（京都市手話学習会「みみずく」）は車いすで登壇。「手話を習うようになり、人と出会うことも、出掛けることも、おしゃべりすることも増えた。車いすへの理解が広がり、以前に比べて行けるところが増えたように、聴覚障害や手話への理解が広がり、コミュニケーション出来る人が増えればいいと思う」と自分自身の変化を手話できっちりと表現した。

同事業団賞を受けた馬場直子さんは「亀岡手話サークル年輪の会」所属。「電子機器など技術の発展でろう者も便利な社会になってきた。でも、直接に対話することで心が通じ合うことも多い。手話で対話し、広める活動を続けていきたい」と正確な手話を駆使した。

身ぶりや表情も交えた豊かな表現で手話スピーチした人たちが表彰でたたえられた（いずれも1月28日、京都市中京区）

高校生の部で最優秀賞を得た北田ラクさんと齋藤璃恩さん（ともに府立京都八幡高南キャンパス）は交互に、学校で学ぶ介護実習での体験や介護についての考えなどを工夫した手話で発表した。優秀賞の山下心優さん（同校）は、テレビ番組で手話を知り学び始め、「この場に立つのは勇気がいったけど、いろんな人に励まされ助けられて発表出来ている。これからも手話を続けたい」と堅実に表現した。

府立聾学校中学部3年の長井優奈さん（動画出場）は、ろう者に広く使われている「日本手話」と「日本語対応手話」の違いという複雑な内容をスムーズな手話でよどみなく説明した。宇治中1年の山本勇人さんは、手話通訳者を目指し手話を勉強していきたいと、元気あふれる動きで発表した。

審査委員長の吉田正雄・同協会手話対策部長は講評で具体的表現にも触れながら各自がしっかり練習を重ねた成果とし、「発表していただいたこと自体も内容もともに素晴らしかった」と敬意を評した。

最後に同事業団の白石真吉人常務理事も手話を交え「手話言語の豊かさに感激した。手話にゆかり深い京都で、この催しを発展的に継続していきたい」と締めくくった。

シンポジウム障害のある人の就労支援
（２０２４年３月１１日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

●●●シンポジウム「障害のある人の就労支援」●●●

相互理解と環境、自信 この3点があれば

機器導入で雇用可能、地域性や特性生かし継続へ

京都新聞社会福祉事業団は、シンポジウム「障害のある人の就労支援」を京都市中京区の京都新聞文化ホールで先月に開いた。障害者雇用を実践する地元企業の経営者や山下晃正・京都府副知事がパネル討論し、参加した関係者ら約80人のグループ討議もあり、就労を進める環境整備や現状での課題などについて認識を深めた。

最初に白石真古人・同事業団常務理事が「障害者雇用への理解を広め、だれもが自分の能力を発揮でき、地域の中でいきいきと働きながら普通に暮らしていける『共生社会』を目指そう」とあいさつした。パネル討論には山下副知事と、本年度に府から「障害者雇用貢献団体表彰」を受けた団体の会員企業から聖護院八ツ橋総本店専務の鈴鹿可奈子さんと山田木工所経営の山田正志さんが登壇、取り組みの紹介や提言もなされた。

鈴鹿さんは「障害者がいることで、会社の中に『輪』ができ、接し方も理解できていく。こうしたことが社会全体に広がればいい」と、障害者雇用を長く続けている。発達障害などの場合、特にコミュニケーションの大切さを感じている。ある精神障害の人の場合、働く中で、少しずつ周囲とも話せるようになってきた。変わるきっかけ作りも大切だ」と語った。

山田さんは「家具や建具の注文生産会社で、雇用後に、安全面もあり障害者の就労は無理と思った時期もあったが、ボタン操作できる3次元加工機を導入して可能になった。作った製品をほめられてやる気を出してくれた発達障害の人のケースもあった」と報告した。

山下副知事は「京都府内の障害者雇用率は、法定雇用率を上回り、評価されている。職種別にはまだ差があるが、ものづくり系企業の身体障害者雇用は進んでいる。大手企業は雇用人数も多い中、よくやってもらっている」と府内の状況を話した。またコーディネーターの石井雄一郎さん（障害者雇用を続ける企業経営者）と交互に、障害者の法定雇用率の上昇など制度整備が進んできたが、「働ける障害者の取り合い」的な状況が生まれたり、大企業に比べ中小では雇用が難しいなどの課題や、「大学生の就職段階で発達障害が分かることも多く、対応が難しい問題だ」などとも指摘した。

伝統産業の多い京都の地域性や各々の企業の特性を生かした継続した就労・定着への支援や連携などについても話し、多様性のある社会や雇用の在り方に関しても、それぞれの立場から言及、障害者雇用の有用性を強調した。

グループ討議後の発表では「障害者の就労には、雇用者や同僚との相互の理解、就労環境を整える、働く自信を持ってもらう、の3点が大切」「働き方は人それぞれ。多様でいい」「企業側では、『法定雇用率を満たすために障害者を雇用したが、結果的には雇用してよかった』という声が7、8割になる」など就労への思いや願いを語るさまざまな意見が報告された。

シンポジウムでは障害者雇用をめぐり活発に意見交換された（2月18日、京都市中京区）

みんなで海釣り-障害のある人の体験講座
（２０２４年９月２３日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

書・杭迫柏樹

みんなで海釣り―障害のある人の体験講座

障害のある人たちの余暇活動として開いている「みんなで海釣り―障害のある人の体験講座」（主催・京都新聞社会福祉事業団、神戸新聞厚生事業団）が今年も7、8の両日、宮津市であった。京都、滋賀、兵庫の3府県から介助者と合わせて52人が参加、ボランティアら124人も加わった。府立海洋高校桟橋では、50㌢級のチヌに歓声があがるなど、にぎやかに大小の魚を釣り上げ、交流を楽しんだ。

1998年から毎年開かれており、コロナ禍の中断後に昨年再開された。

7日は、府立青少年海洋センター・マリーンピアで開講式が開かれ、海洋高生の講座「海のふしぎについて」もあった。19人の生徒4グループが岩ガキ養殖やプラスチックごみによる海洋汚染、海の環境保護などについて発表した。岩ガキ養殖では、エサもいらず水質を改善するなどのメリットの一方、成長には4、5年はかかることや海から揚げて殻まできれいにするには手間がかかるなどの点も伝え、味が良いことを強調した。ヒレに毒があるアイゴも調理の工夫で美味になると発表された。夜には、釣り方や危険な魚の見分け方、救命具のつけ方を学んだ。

8日朝には海洋高で約70人の同高生・教職員やボランティアらが迎えた。参加者は、夏のような日差しの桟橋で魚釣りに挑戦し、ハタやカマスなどを釣り上げた。同高生と京都府磯釣連合会や釣り愛好団体の会員らは、釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど手助けをした。

京都市伏見区から6回目参加の山本勇太さん（19）・新一さん（55）親子は「今日はまだ釣れんけど、小学生で初参加した時に大漁だったんで、再現を狙ってよく参加します」と糸を垂らした。

車いすで釣りざおを握る「みんなで海釣り―障害のある人の体験講座」の参加者（宮津市・府立海洋高校桟橋）

釣り針にエサをつけたり釣った魚を網ですくうなど海洋高生も手助けした

3府県から170人超参加
桟橋でトライ、大物に歓声

海洋高生手助け、交流にぎやか

左京区の畑田めぐみさん（58）は初参加。今回で15、16回目の参加という夫の弘呂志さん（64）は「釣りは自分でも行くけど、この講座はいろんな人との交流が楽しい」とし、「今日は全然釣れんなあ」と言いつつ満足顔。上京区の山岸秀夏さん（18）に付き添った母親の文子さん（42）は昨年に続いて2回目の参加。「子どもと同年配の高校生とふれあえるのも楽しい。昨年は初めてで釣れなかったけど、今年はリベンジ」と話し、高校生と一緒にアジやカワハギを釣り上げ「たくさん釣れれば家でおかずに」と笑顔を見せた。

右京区から初参加の近藤聖一さん（79）は脳梗塞の後遺症や心臓に不安があり、「以前は大阪湾などにも行ったが病気もあって機会がない。久しぶりの釣りは海も周囲の山の緑もきれいで、気が安らぐ」と釣りざおを握った。

兵庫県三田市の依藤準平さん（42）は、翔太さん（8）を連れ「普段は釣りの機会がなく、昨年初参加し面白かった」と楽しんだ。表彰式では計量と採寸結果に従い上位入賞者に釣りざおなどの賞品が贈られた。

主な協力団体は次の通り。

【後援】京都府、宮津市、宮津市社会福祉協議会、KBS京都【協力】日本釣振興会近畿地区支部・京都府支部、全日本釣り団体協議会、京都府磯釣連合会、MFG、GFG、京都府漁業協同組合、訪問看護ステーションふぉすたあ伏見【協賛】アサヒフーズ、がまかつ、東レ・モノフィラメント、ハヤブサ、マルキュー、マルゴ

京都新聞福祉賞・京都新聞福祉奨励賞 贈呈式
（２０２４年１月３１日付 京都新聞朝刊）

「頑張りや更生 支えたい」

京都新聞福祉・奨励賞贈呈式

京都や滋賀の社会福祉向上に功績のあった個人や団体をたたえる「京都新聞福祉賞」と、福祉分野でのリーダーとしての活躍を期待する「京都新聞福祉奨励賞」の贈呈式が31日、京都市中京区の京都新聞文化ホールであった。福祉賞に1氏1団体、奨励賞に3団体が選ばれた。

京都新聞福祉賞を受賞する松浦一樹さん（左）＝京都市中京区・京都新聞文化ホール　撮影・辰己直史

京都新聞社会福祉事業団の主催で、1965年から続いている。

福祉賞を受賞したのは、障害のある人や非行少年らの就労と自立を支援するNPO法人「ENDEAVOR EVOLUTION」（伏見区）の理事長松浦一樹さん（55）と、薬物やアルコール依存症などに苦しむ女性を支援するNPO法人「リバティー・ウィメンズハウス・おりーぶ」（大津市）。奨励賞は、不登校の児童生徒のきょうだいを支援する「こころ停留所」（右京区）、外国籍の未就学児向けの日本語教室を開く「りんぐえっじ」（八幡市）、障害のある子とない子がともに歌う合唱団「ホワイトハンドコーラスNIPPON京都チーム」（上京区）に贈られた。

式では、事業団の大西祐資理事長が「それぞれが使命感を感じて活動し、自らの経験をもとにした優しいまなざしで多くの人に夢や希望を与えている」と述べ、賞状を手渡した。警察官を辞めて福祉の道に進んだ松浦さんは、受賞スピーチで「チャレンジと失敗を重ねてここまで来られた。これからも障害のある人や罪を犯した人の頑張りや更生が報われる社会を目指したい」と力を込めた。

（佐々木千奈）

京都新聞ともに生きるフォーラム
（２０２４年1月１５日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

●●● ともに生きるフォーラム ●●●

遺贈は額より思い重視

老いは「生ふ」、成熟示す

京都新聞社会福祉事業団は昨年末に京都市中京区の京都新聞文化ホールで、命を尊び共に助け合って生きる社会のあり方を考える「ともに生きるフォーラム」を開いた。同紙朝刊「福祉のページ」のコラム「暖流」を今春から執筆する予定の平等院（宇治市）住職・神居文彰さんら2人がそれぞれの分野から人生の心構えなどについて話し、市民約百人が熱心に耳を傾けた。

三井住友信託銀行京都支店財務コンサルタントの土谷紀久さんは「自分の生きた証を社会貢献に～遺贈による寄付のメリット・留意点と具体例～」と題して講演。土谷さんは、生前の寄付や遺贈（遺言による寄付）、相続財産の寄付の特徴や違いを説明したうえで、遺贈のメリットについて「自分の生活資金を気にすることなく、残った余剰財産から寄付出来る。自らの思いを遺言書にかくことも可能」などとした。

また「遺言は元気なうちに作成しましょう」とアドバイス。NPO法人に遺贈された財産は相続税の課税対象外になることや、不動産を遺贈する場合には譲渡所得として所得税が課税されるケースもあることなど、税制面での注意点も具体的に分かりやすく説明した。遺贈について「高額である必要はない。思いを実現することが大切だ」と話し、遺言については「その人を信じて、その人に託す」ことが重要だと締めくくった。

神居さんは「命の尊さ・共生を考える」との題で講演。平等院の風景や文化財、仏像などを多数のスライド写真で紹介しながら多様なイメージを提示。「命は有限である」と前置きして「今この時間を大切に」と直言。「生まれた時から人は一人ではない」とし、「人と人との結びつきの追認体験も必要だ」「どのような結びつきを持つかということは、縁ということ」と仏教的な知恵も披露した。

「個では生きられないのだから、自己以外の存在の尊重が必要」とも述べ、宗教者としての立場から「キリスト教は啓示の宗教と言われるが、対比するなら仏教は気づきの宗教」と指摘。平等院や寺の借景を例に「自己の所有を越えたものを美しいと感じる心の暗喩だ」とも話し、「人はできないことばかり、間違うことばかりだが、そういった人間とともに生きていくことが大切」と説いた。

「老いは『生（おふ）』であり、人としての成熟だという考えもある」「成熟とは温かみを持った時で、人は大人になる」。また「人と人との垣根を取りはらった時に成熟したともいえる」とも述懐した。

宇治市の生活介護事業所「宇治作業所のびのび」（社会福祉法人宇治東福祉会運営）が同事業団の助成金で購入した業務用ミキサーを活用して商品化したユニークな焼き菓子「おからスコーン」と黒糖クッキーが、参加者に土産として配られた。

㊧遺贈による寄付のメリットなどを具体例で説明した土谷紀久さん
㊨「個では生きられないのだから、自己以外の存在の尊重が必要」などと話した神居文彰さん（いずれも2023年12月16日、京都市中京区の京都新聞文化ホール）

自己以外の存在の尊重が必要

（２０２４年３月２５日付 京都新聞朝刊）

●●● 京都新聞社会福祉事業団 ●●●

書家・杭迫柏樹さん
「ともに生きる」揮毫

京都新聞社会福祉事業団が来年度に迎える設立60周年に合わせ、活動理念「ともに生きる」の書を、書家杭迫柏樹さん（89）が揮毫した。「自然体の境地でしたためた。理想の社会像に通じるすばらしいメッセージだ」と共感の思いをこめたという。

京都新聞社会福祉事業団は、京都新聞社の福祉事業部門を独立させて1965年3月に発足した。一人一人の命を大切にみんなが助け合って生きる社会を目指す理念のシンボルとして、京都府と滋賀県で行う福祉事業や募金の呼び掛けなどさまざまな場で「ともに生きる」と掲げてきた。

同事業団設立60周年を機に杭迫さんに揮毫を依頼した。

日展内閣総理大臣賞や日本芸術院賞を受賞し、日展名誉特別会員の杭迫さんは、京都新聞と京都新聞社会福祉事業団が主催のチャリティー美術作品展にも書を寄贈してきた。

京都市伏見区の自宅で、早朝から筆を手にする。「ともに生きる」

力強く筆を走らせる杭迫さん（京都市伏見区）＝撮影・奥村清人

「理想の社会表す言葉、自然体の境地で」

の揮毫について杭迫さんは、70～80枚の中から選んだ書を壁に貼って3日間見比べた。そのうえで「無理と無駄がない、最も自然体で書けた」。そう判断した書き出しの数枚から選んだという。

自ら歩んできた表現の道に関して「若い時はさまざまな工夫を試みて右往左往し、壮年期には鋭く個性を研ぎ澄まして峻険さを増す。経験を重ねた先にようやく、そのどちらでもない自然体の境地にたどりつく」としながらも「若年と壮年時の経験は決して無駄ではない。成熟に至るまでに必要な積み重ねだ」と語る。

そのことは、ともに生きるというメッセージと重なる。「生まれたばかりの子から青壮老年の各世代、さまざまな職業、すこやかな人やハンディがある人…すべての人々がともにあらんとする理念を象徴する言葉だ」

「卒寿記念　杭迫柏樹の世界展」は、11月19日から24日に京都文化博物館6階（中京区）で催される。自身の集大成として「意気を新たにすべし」と年頭に誓ったという。

「ともに生きる」というメッセージへの共感を語る杭迫さん

◆第４１回京都新聞チャリティー美術作品展

「第４１回京都新聞チャリティー美術作品展」を ２０２３年８月１６日（水）から２１日（月）までの６日間、京都髙島屋グランドホールで開催しました。来場者は４５０８人、入札件数は３０７１票の応札をいただきました。
京都新聞チャリティー美術作品展での寄付収入（落札金）は、当事業団が取り組む「愛の奨学金」事業をはじめ、障害のある人や高齢者、子どもたちのための助成・贈呈事業や、福祉団体に助成を行う福祉活動支援事業、地域福祉の向上に功績があった個人、団体を顕彰する「京都新聞福祉賞・福祉奨励賞」褒章事業などの大きな力となっております。

２０２４年度は、京都新聞社会福祉事業団 設立６０周年「第４２回京都新聞チャリティー美術作品展」を２０２４年１２月１８日（水）～２３日（月）まで、京都高島屋S.C.７階グランドホールで開催します。

（２０２３年８月１７日付 京都新聞朝刊）

著名作家ら寄せる

福祉充実願う 美術作品千点

京都新聞チャリティー展始まる

全国の洋画家や日本画家、陶芸家、宗教家らが寄せた作品約千点を展示する「京都新聞チャリティー美術作品展」が16日、京都市下京区の京都高島屋で始まった。

京滋の福祉充実への願いを作品に込め、日本画家の千住博さん、陶芸家の大樋陶冶斎さん、イラストレーターのわたせせいぞうさんら各界で活躍する人たちが参加。今年3月に92歳で亡くなった陶芸家・今井政之さんの遺作「備前象嵌海老瓶子」も並ぶ。

ほかにも、法隆寺の夢殿や富士山など国内の美景を描いた洋画や日本画、涼しげなガラス製の食器などが並び、来場者が目当ての品を求めて会場内をゆっくりと巡っていた。

入札で購入者を募る方法で、収益は福祉施設への寄付や奨学金の給付に役立てられる。21日まで。午前10時～午後7時（最終日は午後4時閉場）。

（太田敦子）

美術家や宗教家、著名人が寄贈した作品の入札を通して福祉の充実を図る「京都新聞チャリティー美術作品展」の会場（京都市下京区・京都高島屋）

京都新聞
チャリティー
美術作品展

42

24
36

（２０２３年８月１５日付 京都新聞朝刊）

ともに生きる

第41回京都新聞
チャリティー美術作品展

3世代出展、継ぐ心

社会奉仕、願いこもる

16日から京都高島屋、900人が協力

第41回京都新聞チャリティー美術作品展（京都新聞社会福祉事業団・京都新聞主催）が16日から京都市下京区の京都高島屋で開かれる。美術作家や宗教家らの協力で1983年から続いている。今回も約900人から陶芸、工芸、彫刻、洋画、版画、日本画、書など千点を超す寄贈があった。

第1回から善意を届ける作家も多い。その一人、文化勲章受章の陶芸家今井政之氏は、今年3月に92歳で死去。しかし長男眞正氏（62）、次男裕之氏（58）＝いずれも山科区＝、孫の完眞氏＝右京区＝の厚意で遺作「備前象嵌海老瓶子」も含め、3世代の作品が出展される。遺作は生命や自然を表現してきた政之氏らしく、面象嵌の技法で繊細で鮮やかにエビを写す。「長寿の象徴でもあり、脱皮して成長していく意もこもっているのでは」と眞正氏。政之氏は今年の広島サミットで各国首脳に贈られた花瓶を制作した。それに似た瓶子について兄弟は「父はオバマ大統領の広島訪問に感激し、オバマ氏に作品を贈ったほど平和への願いは強かった。父の思いをチャリティーにと考え、その思いを持って」と口をそろえる。

生物を題材に彫刻で培った造形力を生かす眞正氏の陶器は「白花文六足花瓶」。「父の死去ということもあり白い花にした。可憐に咲いた花をモチーフにカニのイメージも重ね、動くようなものを表現してみた」と解説する。金石造形の裕之氏の「Play of color confeito」は、水晶が素材の文鎮を白金で彩色。「地球の作った素材を造形する思いで制作している。父も土という地球からの贈り物を造形していたので、思いは重なる」と話す。完眞氏は、陶作品「木目碗」を寄せた。

同じく連続出品する書家の杭迫柏樹氏（89）＝伏見区＝の作は、鋭く清冽な筆遣いで調和体の「志を果たして」。「静岡県の森町から京都の大学に書道の勉強を志して来ました。緑の山を背負い町を清流が貫き、遠州の小京都と呼ばれています。この歳までに日本芸術院賞などを頂き、昨年には森町の名誉町民第1号にも。最近はこの詩文も書くようになりました」と語る。チャリティーについて「職業を通じて社会奉仕するのが願い。大変やりがいを感じている。書を通して役立てることがあれば、なんでもやりたい」とも。

日本画家の重鎮、浜田泰介氏（91）＝大津市＝も初回からの常連。作品「初秋石鎚と月」は、星空と満月を後景にススキの穂を配し、月光を映した霧に浮かぶ群青色の山並みが印象的。「石鎚は帰省の折に車窓から必ず見ていた故郷の山。米国在住時にチャリティーの意義と楽しさを経験し、チャリティーだからこそ良い作品を出そうとの思いは強い。自分にとっては生きてる証という意味も」と磊落に破顔した。

21日まで。無料。

上今井政之氏の遺作を手にする裕之氏（右）と自作を持つ眞正氏。後ろは、政之氏の遺影とサミット時に制作した花瓶
中書を前に思いを語る杭迫柏樹氏　下浜田泰介氏の「初秋石鎚と月」

◆第４１回京都新聞チャリティー美術作品展「作品お渡し会」

２０２３年9月２３日（土）、２４日（日）両日に京都新聞文化ホールにて、第４１回京都新聞チャリティー美術作品展で落札された作品を引き渡す「お渡し会」を開きました。作品一点一点の点検後、丁寧に梱包して、落札者に作品の引き渡しを行いました。